

アジア・太平洋戦争末期の日本における民衆意識の特質について  
佐々木 啓（茨城大学）

本報告では、アジア・太平洋戦争末期における日本の戦時体制の崩壊過程において、民衆がどのような戦争観、秩序意識を持っていたのか、検討することにした。この課題設定が含意することは、以下の三点である。第一に、物資不足や空襲の激化などによって特徴づけられる当該期の日本で、民衆が眼前の戦争、戦時体制について、どのような捉え方をしていたのかを明らかにすること。第二に、物資不足や空襲の激化などの経験が、民衆の戦争観にどのような影響を与えたのかを明らかにすること。第三に、そうした意識のあり方が、戦後における民衆の戦争観にどのようにつながっていくのかの展望を示すこと、である。

戦争末期の民衆意識の歴史的特質については、すでに多くの研究のなかで言及されてきた。たとえば1970年代には、安丸良夫「戦後イデオロギー論」（歴史学研究会・日本史研究会編『講座日本史』8、1971年、東京大学出版会）が、天皇制国家のタテマエと民衆のエゴイズムが分離していく過程としてこれを捉えており、藤原彰編『日本民衆の歴史9——戦争と民衆』（三省堂、1975年）も、民衆が国家との関係を切り崩し、「利己的主体形成」を遂げていく様相としてこれを理解している。安丸は、民衆のこうした動向がそれまでの価値観との深い内面的な対決を経ないものであったことを述べており、藤原編著も、国家との対決を経ることなく個人が国家から自立していく過程として捉えている。つまり、①近代天皇制国家による統合からの逸脱の広範化、という状況と、それが②国家権力との内面的、外面的対立を経ることなく行われたことが、重視されていたといえる。空襲や物資不足に代表される体験の過酷さはたしかに民衆の厭戦意識を増幅したが、その意識が明示的に権力批判に向かうようになるのは敗戦後のことであり、その意味で限定的なものであったことが示されているといえるであろう。こうした理解は、吉見義明『草の根のファシズム』（東京大学出版会、1987年）など、その後の研究にも引き継がれているが、ミクロレベルでの民衆の世界観の転換の実相や、戦後日本社会の平和意識との連関については、なおも検討の余地があると思われる。近年の研究では、大串潤児『銃後』の民衆経験』（岩波書店、2016年）などがこれらの論点に触れているが、飢餓や空襲といった過酷な戦争体験との関わりで、さらに分析を深めていくことが必要であろう。

そこで本報告では、第一に、官憲の調査資料に基づきつつ、空襲や物資不足のなかでの民衆意識のあり方について検討する。具体的には、『特高月報』や『社会運動の状況』をはじめとする特高警察の治安関係の史料を題材に、そこに表れる民衆意識の特質について考察することにした。治安当局の調査資料であるがゆえに、そこで記述される民衆の姿は、常に「治安」とのかかわりで捉えられる。当局の目を通して、民衆の戦争体験と戦争観の連関性がどのように結びつけられていたのか、その特徴について検討したい。

第二に、民衆の書いた日記などの史料から、体験と戦争観の結び付きのあり方について検証する。報告者は、すでに「総力戦体制下における徴用工の意識動向」（『早稲田大学大学院文学研究科紀要（第4分冊）』55、2009年）、「民衆の徴用経験」（アジア

《第2分科会》  
戦争責任

民衆史研究会・歴史問題研究所編『日韓民衆史研究の最前線』有志舎、2015年)など論文において、日本人民衆の日記・記録類を用いて、彼らの戦争体験の特質について検討した。今回は、特に空襲のこと、物資不足のことを民衆がどのように記述しているのか、戦争末期の様相を軸にして検討を加えることにしたい。

第三に、以上の検討をふまえて、戦時下の戦争体験と、戦後の戦争観とのかかわりについて検討する。戦後日本社会の戦争観のなかでも、政治的、思想的立場を超えてしばしばみられるのが、「どんな理由があっても戦争だけは二度とやってはならない」という素朴で絶対的な平和主義である。それは、吉田裕『日本人の戦争観』(岩波書店、1995年)によれば、軍隊や戦争に対する嫌悪感の根強さということになるし、和田進『戦後日本の平和意識』(青木書店、1997年)によれば、「紛争巻き込まれ」拒否意識として、1950年代の平和運動を下支えする力を持つものであった。

こうした意識の背景には、かつての戦争における体験が過酷で悲惨なものであったことが、日本社会のなかでくりかえし確認され、継承されてきたことがあるだろう。だが、そうした戦争被害の「記憶」のあり方と、実際の戦時下にあつて戦争被害を当事者たちがどう認識したのかは、必ずしもイコールではない。戦時下を生きている当事者が、眼前の状況をどのように捉えたかを明らかにすることは、戦後形成された平和意識の特質を考える上でも一定の意義を持つであろう。